

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第19章



フランス最南端の州の中心部、狭い尾根の上に、

背の高い草が分かれて、月明かりに照らされた空き地に一匹の野ウサギが飛び込んだ。用心深いその動物は、耳を立て、鼻をぴくぴくさせながら、開けた小高い丘を調べた。そして、そっと前進すると、突然石のように固まり、頭を横に傾け、ガラスのような黒い目が一つだけ天を見つめていた。石化した動物は、
たった一つの小さな点 星空を背景に、空高く舞い上がるシルエット。ウサギは、それが猛禽類だと思い込んで
いるその下で、じっと動かずに座っていた。

しかし、高く舞い上がるその物体は、広げた翼を除けば、鳥とはほとんど似ていなかった。訓練された目であれば、それが空を飛ぶ人間の姿だと正しく見抜くかもしれない。突然、驚いた野ウサギはくると向きを変え、現れた長い影の中へと逃げ込んだ。茂みと深い影の、一見安全な場所で、幽霊のような緑がかかった手が茂みをかき分け、もがき苦しむ野ウサギを捕らえた。骨が折れる音が響き、草の生い茂る丘に新たな静寂が訪れた。

尾根のはるか上空を滑空し、星空を背景に舞い上がるラザロは前進を続けた。風は彼の翼のリズミカルな回転に合わせてうなり声をあげた。

フランス最南端の海岸線。ラザロの高台からは、月光に照らされた大地が、まるで創造のあらゆる側面をゆっくりと展開する荘厳な巻物のように、湾曲した地平線から溢れ出ているのが見えた。左手には、低い丘が連なり、黄金色に輝き、地球の東端をはっきりと示していた。右手には、硫黄色の三日月の下、起伏に富んだ地形が、水銀のように溶けて霞んだ空に溶け込むかのような、ぼんやりとした西の地平線へと続いていた。

ラザロはとっくにローヌ川の曲がりくねった流れを離れ、今は点在するむき出しの丘陵とまばらな森の上を真南に向かって飛んでいた。眼下には、曲がりくねった小川が大地を切り裂き、それらはまるで黒く彷徨う短剣の傷跡のように、大地の表面を汚していた。小さな建物群が視界に入ってきた。川岸に建つ茅葺き屋根の建物は、趣のある漁村の存在を暗示していた。それらの間には、田舎道が土の血管のように伸び、薄暗い森や山麓の谷間に散らばり、消えていった。

眼下に広がる道や小川の曲がりくねった道筋は、起伏の多い地形に阻まれ、どれも危ういものだったが、ラザロは絶え間なく吹き付ける横風や下降気流に逆らい、明確な進路を切り開いた。彼はまっすぐで狭い道を、ひたすら南へと進んだ。しかし、眼下に広がる大地のうねりにはほとんど目を向けていなかった。絶え間なく吹き荒れる風のうなり声と、絶え間なく羽ばたく翼の下で、ラザロはまるで盲目的に飛んでいるかのように感じた。彼の意識のほとんどは内面に向けられ、その注意は苦悩に満ちた心に集中していたのだ。

おそらく天使だけが、彼のように重い心が、星々をかすめるようにして空中に留まり、自らの碎け散った状態の重力によって地上に落下しないという奇跡や方法を見つけ出したのだろう。ラザロの心は、過ぎ去った日々の遠い記憶で揺れ動いた。そして、それらの記憶を完璧に思い出すたびに、記憶はまるで山のように積み重なり、彼が純粹に思い出す自分自身の痕跡をすべて埋め尽くしてしまうようだった。慰めとなる囲いがなくなったら、

カタコンベのことも、トンネルの雑用も、慰めてくれるイワンやオディーノも、叱ってくれるクロディウスやグレヴィルさえもない。心配そうな仮面もなくなったラザロは、涙を流した。かつては心の奥底に隠された、ただの泣き言に過ぎなかった、あの不安な部分を、もはや否定することはできなかった。それはついに、胸の中で強くざわめき始めたのだ。それはもはや、しつこい痛みではなく、おそらく目覚めの時だった。

そして、彼の注意を奪う叫び声のような意識。実際、その厄介なささやきは苦痛の叫び声へと膨れ上がり、ラザロの最も大切な部分が、あの恐ろしい前夜、修道院を去らざるを得なかった時に本当に死んでしまったことを完全に証明した。そして、彼の心の中の声は彼自身のものであったが、確かにそれは

冒瀆的で残忍な漁師、貪欲でいがみ合う領主ダルシクールとユゴン、冷酷で忌まわしいポーン船長、そして何よりも、彼ら全員であり、それ以上の存在である、徹底的に不信心な母親によって育てられたラザロ。そしてラザロにとって、彼らとの苦い記憶は、かつての地下墓地の居場所という心地よい子宮から追放される前に経験した、以前の完璧な世界についての、喜びにあふれた無邪気な夢など、彼のあらゆる完璧で心温まる思い出を食い尽くすように思えた。

しかし、悲しみが時に精神を奪い去るとしても、理性は必ず、失われたものを再び取り戻す。ラザロは悩める心を閉じ、より意味のある考察と計算に心を開いた。彼は南フランス上空を飛行し、イタリアへ向かっていた。かつては到底達成不可能な目標だと彼が素朴に考えていたこと、どこかへ飛んで修道士を迎えに行くこと、は、実は実に合理的な偉業だった。なぜなら、彼はまさに今それを成し遂げようとしていたからだ。彼はサルヴァティーノ修道士と共に修道院に戻った後、すぐに何が起こるかを考えた。しかし、隊長が従者のローブに身を包んだグロテスクな男という正体を露わにした以上、彼の人生は以前想像していたものとは異なる道を辿るだろうと彼はよく分かっていた。この出来事から、修道院の修道士たちが彼を修道士として聖なる共同体へ受け入れることはできないだろうと、彼は十分に理解していた。彼は、彼らがもはや彼を聖職者として彼らの信徒の中に住ませ、奉仕することを許さないだろうと確信していた。彼は、彼らが二度と

彼を修道院の信頼できる地下墓地の従者ラザロとして崇敬する一方で、醜く不信心な翼のある獣として罵る。彼は、自分の居場所は聖域の祈りの中ではなく、その上の石の上だと、はっきりと分かっていた。それでも、彼は選択肢を再計算し、結局は同じ揺るぎない結論に至った。修道士を連れてくるという約束を固く守り続けることだった。

「そして、もしそこから何らかの善意が残されている可能性があれば」と彼は推測した。「おそらく、修道院の修道士たちは彼の違いを超えて、彼を獣よりも人間らしい存在だと判断するかもしれない。」

しかし、ラザロにとって、どんなに熟慮しても状況が好転するとは思えなかった。時は大地を巡り、開いた門石の重みが肩にのしかかる中、ラザロは南フランス上空を進み続けた。翼の汗が月光にきらめき、そして

夜が更けるにつれ、彼は地上に近づいても進路と速度を崩さなかった。巨大なコウモリのように、彼は木々の梢の上を疾走し、羽ばたきで樹冠の葉を揺らした。彼は呼吸に合わせて翼を動かしながら、前進し続けた。押し上げ、上げ下げ、吸って吐く。時間が再び動き出したかと思うと、カモメの群れが彼のそばに集まってきた。休んでいたカモメが次々と空に舞い上がり、彼を追いかけた。鳥たちは次第に群れを成し、やがて数百羽もの巨大な群れとなり、ラザロをほとんど飲み込んでしまった。

彼らから逃れようと高く舞い上がったが、彼らは追ってきた。彼は急降下し、左に旋回し、右にロールした。しかし、彼らは全く同じ空中機動で反応した。彼は水平飛行に移り、地平線を求めたが、そこには渦巻く尾羽の白い壁しか見えなかった。そして彼の下では、地球の表面が白い翼のうねる海に沈んでいた。

ラザロは彼らに向かって手を伸ばし、「今すぐ出て行け！」と叫んだ。彼らは、まるで彼の無礼な命令が集団的な抗議を招いたかのように、甲高い声で彼に向かって叫んだ。

「どけ！」と彼は叫んだ。すると鳥たちは鳴き声を上げ、さらに集まってきて、まるで百羽のひよこが母カモメにしがみつこうように彼を覆い尽くした。

「何も見えない！」

群れはただおしゃべりで応えただけだった。

「私は鳥ではない！」

カモメたちは一斉に不満を漏らした。

「違うよ！」

彼らは鋭い反論の嵐を巻き起こした。

ラザロはため息をつき、彼らに身を委ねた。

盲目的に彼らの間を進んでいったが、それでも彼は前進した。さらに、群れは空間感覚に優れているように思えた。なぜなら、どの鳥も他の鳥の羽ばたきを妨げたり、ましてや彼自身の羽ばたきを妨げたりすることはなかったからだ。しかし、彼らにはそれ以上のものがあつた。ラザラスは、彼らの見開いた暗い瞳に惹きつけられた。表面的には、彼らは同じ野性的な激しさを共有しているように見えた。彼は彼らの瞳を深く見つめた。かつてマウンテンマウスの犬たちの瞳を見つめた時よりもさらに深く、そして彼は、何も見つけられなかった。そして

おそらく、彼らの心に宿る空虚さが、ラザロをくすくす笑わせたのだろう。何も知らないカモメたちは、彼の笑い声に合わせて鳴き声を上げた。

ラザロはくすくす笑い、彼らも一緒にけたたましく笑った。そして、彼が笑えば笑うほど、彼らは騒々しく彼らは答えた。ついにラザロは痙攣と涙に襲われた。彼は本当に自分の陽気さの種を知っていて、それを公然と楽しんでいた。カモメの露骨な視線

彼らの目は、マウンテンマウスのコウモリの目と同じくらい大きく、虚ろだった。修道院の地下墓地でクロディウス修道士が追いかけたネズミの目と全く同じだった。そしておそらく、ラザロがサンダルに洗面桶の水をぶちまけた時の修道士自身の目と同じだったのだろう。思い出と現実の両方を含めて、彼らの視線は

ラザロには、決定論と無知という、同時でありながらも不協和な状態が伝わってくるようだった。もし彼が最初に彼らの冷たく広い視線の中にユーモアの種を見出さなかったら、彼は虚ろで燃えるような目の群れの中を飛ぶことに打ちのめされていたかもしれない。しかし、彼は前進を続けるうちに、同行する犬と親密な対話を始め、カモメには到底真似も理解もできない秘密を犬に語った。

彼は鳥たちに、マウンテンマウスのコウモリにしか打ち明けたことのない真実を語った。実際、彼らはラザロに非常に興味を持ち、好意的に受け止めた。彼の演説が続く中、時折、彼らは一斉に鳴き声を上げ、カラスのように鳴き、または、共通の意見や矛盾を伝えるために、クークーと鳴く。

しかし、やがてカモメたちは彼の存在に飽きたのか、飛び去っていった。群れはまばらになり、夜空の光が羽ばたく姿を照らし出した。さらに多くのカモメが散り散りになり、ラザロの足元の起伏のある大地が露わになった。

残っていた群れは突然一斉に飛び立ち、ラザラスは一人取り残された。目の前のカモメの壁が消え去ると、彼の目には、最後に見た時とは全く異なる、思いもよらない南の地平線が広がっていた。その新たな姿は、まさにパノラマのような恐怖の風景としか言いようがなかった。彼は後ろに身を乗り出し、翼をばたつかせ、突然静止してその場に静止した。彼は不自然なほど重く感じながら、空中を歩いた。まるで生命の血が血管から抜け落ちたかのようにだった。骨に石の重力が宿ったかのようにだった。そして、その不安な瞬間、ラザラスは地面の引力を完全に感じているかと思いつつ、目の前に広がる、一見説明のつかない光景の巨大さを吸収した。

地球全体が、まるで世界を洗い流して消滅させるかのような、巨大な黒いガラスの板に飲み込まれたかのようにだった。それは、ノアだけが知ることでできる、果てしなく続く虚無の、畏敬の念を抱かせる光景だった。

修道院の地図と飛行距離を重ね合わせた記憶から、ラザラスは自分がレオン湾に到着したことを知っていた。しかし、その湾がまるで海のライオンのように巨大で広大だとは想像もしていなかった。新たな不安が湧き上がってきた。彼は肩をすくめ、螺旋状に急降下し、羽毛に覆われた仲間たちの後を追って、陸と海を隔てる海岸の岩礁へと戻った。

彼は地上にいる鳥たちの間に降り立ち、広くて風化した石板の上に腰を下ろした。

カモメたちは不平を言いながら羽ばたいた。彼らは彼のブーツをつつき、おそらく彼が自分たちが守っていた、浜辺に打ち上げられた目の空洞の魚の死骸を盗みに来たかと思われていたのだろう。

ラザロはしゃがみ込み、疲れた腕を膝の上に投げ出した。汗の粒が体中を流れ落ち、内陸の風に逆らって後ろに流れていく。翼をだらりと後ろに広げ、息切れした彼は、まるで熱中症の鳥のようだった。岩の低い台地の上で、彼は気を取り直した。岩の間を激しく波打つ潮が、彼に塩辛い霧を吹きかけるのを眺めた。波打ち際をじっと見つめると、新しい波が来るたびに、海の泡が毛布のように立ち昇り、そして消えていった。近くでは、カニの甲羅の一部が、岩の狭い隙間に引っかかった流木の上に載り、その流木は慌ただしく揺れていた。岩に寄り添うように、藻の密集した糸が水流の中で一体となつてうねっていた。ラザロの傍らでは、カモメたちがようやく自分たちのことに集中し、魚の死骸を巡って争っていた。

そして湾の涼しい風が彼の湿った翼を乾かすと、ラザロは目を閉じ、

永遠に記憶に焼き付いた、新たに体験した音と匂い

海。

彼の心の中で、かつてくすぶっていた不安は、足元の黒い水と調和して渦巻く、しつこい抗議の声へと膨れ上がった。彼は修道院の地図を記憶の中で確認し、修道士を迎えに行く計画では、レオン湾を夕方に横断し、コルシカ島に到着して、再び日の光から身を隠すことになっていたことを思い出した。そして、最初は、その距離を飛行できると知っていたので、その偉業は十分に達成可能に思えた。しかし、鳥の目線ほどの高さから海を眺めると、その姿はあまりにも壮大で、信じられないほど巨大で、地上のあらゆる細部を飲み込み、まるで無限へと容易に伸びていくかのようで、その偉業は達成可能というより、考えられないものに思えてきた。実際、そのしつこい声にはもっともな理由があった。なぜなら、ラザロは、海を渡ることが、彼が生き延びるために頼りにしていた単なる飛行能力の偉業ではないという、不穏な考えを突きつけられたからだ。結局のところ、その声は、ラザロが一晩中飛ぶことはできても、ほんの一瞬たりとも泳ぐことができないことを知っていたのだ。

ラザロは体を前に揺らし、ひざまずき、踵をついて後ろに倒れ込んだ。波の向こうを覗き込み、薄暗い空と溶け合っているように見える暗い海の水平線をじっと見つめた。広大な黒い海は底なしの果てしない深淵のように見え、雲でさえこのような広大な虚空を越えることはできないだろうと彼は思った。彼は南西の空に目を向け、遠くで稲妻が閃光を放っているのを見た。それから彼はため息をつき、カモメたちに物悲しい別れを告げながら立ち上がった。彼は

翼を広げ、空に舞い上がり、一周旋回してから東へ向かい、景色に背を向けた。

月。

夕方の残りの時間と早朝にかけて、ラザロは南のフランスの海岸線。修道院の地図がしっかりと頭に焼き付いていた彼は、その地図を頼りに東の港町マルセイユへと向かった。南からの絶え間ない横風が彼を押し流そうとするかのように思えたが、彼は海を右手に、陸地を左手に見て進んだ。不吉な海へと向かう。そしてラザロにとって、海はますます地獄のような裂け目、飢えた巨大なブラックホールのように見え、彼を嘲笑い、渡ってみると挑発していた。しばらくすると、横風は弱まり、やがて消え、その後、塩気のある風が内陸に向かって吹き込み、それに対抗した。しかし、激しい風はすでに彼の翼に大きな負担をかけており、ラザロは地上に目を向け、そこで夜明けの最初の光から身を守るのに適した場所を探した。

マルセイユからはまだ遠く離れたラザルスは、趣のある港町に降り立ち、

彼は茅葺き屋根の上を徐々に視野を広げていき、町の東端のより人里離れた場所に、広くて岩だらけの丘の上にそびえ立つ、かつての教会の遺跡らしきものを見つけた。詳しく調べてみると、屋根のない急勾配の建物の残骸が目に入った。焼け焦げ、一部崩れた壁がむき出しの石畳の床を囲んでいた。しかし、一見廃墟と化したその礼拝所には、それ以上のものがあることに気づいた。崩れかけた城壁の中に、まるで新築の教会のような趣のある建物が、床石の一部の上に建っていたのだ。新しい教会は、古い大聖堂と共有する石造りの外壁を除けば、完全に木造だった。その木造の小さな建物は、冬の寒さに苦しむ花の胎内に宿る、春を待つ種子を象徴しているようにも見えた。そして、広い丘の東側に広がる墓地を足を引きずりながら歩く骨をくわえた犬を除けば、ラザロは廃墟のすぐそばの土地がほとんど死んでいるように感じた。

彼は崩れた廃墟の壁の中に腰を下ろし、雑草が生い茂る敷石の上にそっとブーツを置いた。ラザラスは顔をしかめ、使い古した翼を丁寧に折りたたみ、暗い影の中へと滑り込んだ。粗末な教会に近づいた途端、その高く細い窓を見て、この建物が自分の求める避難場所には到底不十分だと悟った。ラザラスは背を向け、古い壁の隙間を通り抜けた。

それから、遺跡の外に出ると、彼は壁に沿って進み、崩れた石や背の高い雑草の中を歩き、外側の角を曲がると、雑草の中に隠れてツタに覆われた、大きくて細長い貯蔵庫を見つけた。

小屋は古代の神殿の壁にぴったりと寄り添って立っていた。その低い正面は、密集して朽化した墓石が並ぶ丘の奥に面していた。ラザロは雑草を払い、小屋の風化した蓋を持ち上げて中を覗き込んだ。壊れた道具の柄がいくつか、乾いて腐った麻袋がいくつか、乾いた泥の塊が散らばっている以外は、中は彼が計画していた短い滞在には十分な広さに見えた。彼は小屋の中に滑り込み、蓋を閉めた。

彼は持ち物を整理し直し、新しい日の夜明けに目を閉じた。そして、時間は彼の夢の世界へと戻っていった。

確かに、その箱は頑丈な構造で、しっかりとした壁と、ラザロを眩しい日光から守るための平らな蓋を備えていた。しかし、幸運にはしばしば代償が伴うように、ラザロを生かしたその箱は、簡単に代償を払うことになっていたかもしれない。彼の棺として。翌日の空に雲一つなかったら、彼は間違いなく死んでいただろう。朝の太陽が箱を照らし、ラザロは目を覚まして、自分のすぐそばにあることを考えた。運命。彼は蒸し暑いゴミ箱の中で身悶えし、よどんだ熱い空気を吸い込もうと必死にもがいていた。そして、逃れられない窮地の中で、彼は最も重大な過ち :彼は東向きの木箱の中に身を横たえた。それでも、太陽は燃え盛る火の神のように天に昇り、その下をあらゆるものを探し求めていた

それが消費され、枯れ果ててしまうかもしれない。

正午までに、ラザロは激しい吐き気と恐ろしい自己認識の間で揺れ動く苦痛に苛まれていた。漁師の「ラザロ、ドアを開けろ !神のために！」という叫び声が、何度も耳に響いた。

彼は意識が朦朧とし、心が分裂し、体が苦痛に苛まれていた。まるで拷問の振り子のように、恐ろしい出来事は意識が朦朧としたり、朦朧としたりを繰り返しながら続いた。時計仕掛けのように、意識が朦朧とするたびに、彼の体はより激しい痛みで彼を目覚めさせた。そして、意識が朦朧とする最も苦痛な瞬間、痛みが彼の死すべき運命の儚さを嘲笑うほどに膨れ上がったとき、ラザロは震える手で父の祈りの十字架を握りしめ、もう一度意識を失うことを懇願するしかなかった。しかし、彼に慈悲は降りなかった 何も降りなかった、ただ燃え続ける痛みだけがあった。
容赦のない太陽。

ラザラスは、太陽が西に沈み始める前に死が近いと感じた。大聖堂の廃墟の長い影がようやくゴミ箱の上に伸びた。夕暮れが雲を赤みがかった色で染めると、箱の中の焼けつくような空気が和らぎ、ラザラスは最も深い夕暮れが空を覆うまで、めまいがするような夢から覚めなかった。無数の星と三日月が冷ややかに輝き、大地を癒やした。ラザラスはびしょ濡れの麻袋の上に息を切らして横たわっていた。彼の頭は耳鳴りでくらくらし、それは今や不明瞭な声と絡み合っているように思えた。やがて、耳鳴りは収まったが声は続き、錯乱と現実が彼の心の中でついに分離したとき、彼はその声が明らかに激しい会話のものであると認識した。彼は横向きになり、手を上げ、指をゴミ箱の蓋と枠の間に滑り込ませた。蓋が少し開いていたので、冷たい空気が波のように彼を包み込んだ。彼はじっと横になり、耳を澄ませて交わされる会話の続きを聞こうとした。声は遠くから聞こえてくるようで、おそらく広い丘の下、墓地の奥深くから聞こえてくるのだろう。そして、その会話には何か奇妙なところがあった たとえそれが不明瞭で支離滅裂だったとしても 彼は深く不安になった。

彼はじっと耳を傾けていた。男らしい声が大声で懇願するように言った。「聞いてくれ !もう少しだけ、頼む！」そして、しばらく沈黙が続いた。

「もう少しだけ猶予を与えよう。さあ、急いで立ち去れ。」不自然な返答は、まるでルシファエルの声のように、多くの女性の声が同時に響いた。

しかし、この世のものとは思えないようなその声は、明らかに異質なものに聞こえた。おそらく、より優しく洗練されていながらも、厳格で礼儀正しく、逆エコーのような響きで消えていった。

ラザロは緊張し、呼吸が速くなった。もしその不気味な返答が、それほど低い音色で男の声と絡み合っていなかったら、その言葉はルシファエルから発せられたものだったかもしれない。

彼女自身だった。しかし、その言葉は彼女の言葉ではなかった。ただ、彼女の言葉に似ていただけだった。ラザロは蓋をさらに高く持ち上げ、月明かりに照らされた墓地を覗き込んだ。

「もしよろしければ、お一人にさせていただけませんか？」懇願するような声が訴えた。

それに対して天使の声が答えた。「あまり長くためらってはならない。」

かすかな光が、ざわめく木の葉や雑草を照らし出した。風が弱まると、墓地には新たな暗闇と静寂が訪れた。

ラザロの瞳孔が腫れ上がった。彼は敷地内をくまなく探した後、物置からこっそりと抜け出した。彼は天を見上げた。天は彼に飛翔を促していた。しかし、彼を悩ませる圧倒的な好奇心によって、彼はその場に立ち尽くした。それは、不自然でありながらもどこか懐かしい声で、母の声の旋律に似ているが、声色は違っていた。その瞬間、ラザルスは父の言葉も思い出した。危険なベニオン・トンネルに近づくなと警告された言葉だ。しかし同時に、もしあの禁断のトンネルに足を踏み入れていなかったら、天使の文字やナラムシン巻物について知ることはなかっただろうということも、彼は認めざるを得なかった。そして、自分自身のこと、自分の出自のこと、エルジヨの使い魔についての貴重な知識を得ることもなかっただろう。実際、墓地とその聞き慣れない多くの声から、彼は容易に背を向けることはできなかった。なぜなら、同じような珍しい知識が、ほんの数歩先にあるかもしれないのだから。

闇に紛れて、彼は丘の斜面をこっそりと下り、最も暗い影の中にだけ姿を現した。彼は、荒れた墓の間を音もなく通り抜け、もろい小枝や緩んだ石を踏みつけなかった。彼は墓地の中心部へと不規則で忍び足の道を縫うように進み、古い檜の木陰の林にたどり着いた。そこでは、下草の中に明るく輝く、幽玄な緑色の光が見えた。浅い丘の後ろから木々に近づくと、かつて多くの男たちの声に懇願したのと同じ男らしい声が途切れることなく囁くのがはっきりと聞こえた。幽霊のように、ラザロは土手の裏側を登り、耳を澄ませて、ささやく厳粛な声に耳を傾けた。「たとえ地上のすべてが滅びても、私はあなたと共に残るだろう。」

愛しい人よ。ああ、あの天使はもういつ、どこで私を見つけられるかを知っている。だから、以前のように定期的に姿を現すことはもうできない。彼は私たちの記念日をすっかり覚えてしまったのだ。それでも、私はあなたに、永遠に、そして完全に、必ずやり遂げると誓います。私の心は忠実なので、これまで以上に頻繁に、しかし、以前とは違って、新たな慎重さと、誰にも知られない形で、あなたを訪ねるでしょう。あなたは私の天からの贈り物、愛しい人、そして私が知りたい唯一の天国なのです。

ラザロは雑草をかき分け、崩れた墓標に近づくとしゃがみ込んだ。彼は石の向こうを覗き込み、緑色の光が彼の顔を照らし、瞳孔を細めて

彼はピンホールを見つめながら、明らかに異様な光景をじっと見つめていた。彼の前には、背を向けた男の幽霊のような姿が、二つの墓標のある墓の足元にひざまずいていた。二つの墓は、雑草が生い茂った大きな石垣に囲まれていた。雑草の中から立ち上がった

そして、二つの墓石の中央には、それよりもずっと高く、幅が狭く、装飾的な彫刻が施された石柱があり、おそらく家紋と思われるものが刻まれ、その下に縦書きで目立つように「*~M EDICC I~*」という名前が刻まれていた。スペクターが立ち上がり、振り返って敷地を見渡すと、ラザラスは墓石の影に身を乗り出した。

するとラザロはそれら全てを見た。

その顔は若くハンサムな男、おそらく中年男性で、肩まで伸びた髪と、角張った顎のラインに沿って短く整えられた髭を生やしていた。スペクターは風格のある装いを身にまとい、斬新な衣装の上にマントを羽織り、肩掛けのローブはハイレースブーツの甲にカーテンのようにゆったりと垂れ下がっていた。ラザラスの神によって強化された知覚を通して、彼は夜の闇を覗き込み、その境界のさらに奥深く、そしてさらに深く、絶えず渦巻く漆黒の闇を見つめていた。

幽霊や精霊、彷徨える魂、迷える魂が棲む、幽玄で神秘的な領域の霧に包まれた幽霊の姿は、緑がかった光り輝く体全体と同様に、あらゆる面が輝き、半透明に見えた。

ラザロは空き地に出て、現れた幻影に「ご挨拶申し上げます」と声をかけた。

霊は体を少しひねり、下を向いたまま一瞬動きを止めた。まるで予期せぬ出会いを考えているかのように。それから向きを変え、ラザロの方を向いた。半透明の男は胸に触れ、「私に話しかけているのですか？」と尋ねた。

「はい」とラザロは、人を惹きつけるような笑顔と軽く頭を下げて答えた。

「私の姿が見える？ そして声も聞こえるのか？」スペクターは信じられないといった様子で尋ねた。

ラザロはうなずいた。「できる。」彼は歩き出し、立ち止まった。

「お前のような奴は見たことがない。一体どんな悪魔なんだ？」

ラザロの笑顔が消えた。「私は悪魔ではない。空を飛ぶ人間だ。私はラザロ・ゴグだ。」

幽霊は顎を撫でながらラザラスをじっと見つめた。「そう主張するのだな」そして信じられないといった様子で首を振り、「だが、お前からは何も感じない 全く何も」と付け加えた。

ラザラスはすっかり笑顔を失っていた。彼は息を呑み、幽霊を叱責した。「お前の向こうにある墓石が、お前自身を通してはっきりと見えるのだから、お前自身もほとんど存在しないようだ。」

男は唇をすぼめ、厳粛なうなずきだけでその主張を認めた。

「あなたは精霊、つまり魂のようなものですか？」ラザラスは、その不和を収めようとして尋ねた。

幽霊は両手を広げて現れ、「ご存じの通り、私はそうです」と言った。すると突然、幽霊は腕を下ろし、冷たく彼に告げた。「もしあなたが地獄と結託しているのなら、あなたの長や最高位の手下に、この魂は既に引き取られており、現在天国の待っている仲間の中にいることを伝えた方がいいでしょう。」

護衛。"

ラザロは毅然として弁明した。「私は地獄と結託しているわけでも、全能の主なる神に逆らおうと企んでいるわけでもありません。」

幽霊は彼をじっと見つめ、それから尋ねた。「では、あなたは天と結託しているのですか？」霊はうなずき、同意した。「もしそうなら、私が最後の敬意を表すために、少しの間一人になりたいと頼んだことは、もうご存知のはずです。それなのに、あなたはここにいる。私が逃げ出すとも思っているのか、なぜこっそりと私を監視しなければならないのですか？幽霊は首をかしげ、突然困惑した表情を浮かべた。「あなたは一体どんな神のしもべなのですか？私がこれまで知らなかったような存在で、悪魔の姿で現れ、気まぐれな霊に親切に敬意をもって話しかけるが、悪魔でも天使でもないとは？」

「私はただのラザロです。あなた方を気付いたつもりはありません」とエルジヨは言った。「お邪魔して申し訳ありません。ちょうどあそこで休んでいただけです」とラザロは言い、丘の上の方を指差した。彼は告白を続けながら大聖堂の廃墟を見つめ、「その時、私は多くの人々の声を集めました。まるで一つの声のように。そして墓石の間に光が見えたので、あなたの声に導かれて行ったのです。悪意は全くありませんでした。」

幽霊の顔に新たな疑念の表情が浮かんだ。「休んでいたのか？墓地で？死者の中で？」亡霊は腕を組み、うなずき、さらに問いかけた。

「なぜあなたは、この墓地に眠ることを選んだのですか？」

「たまたま通りかかった時に見つけたんです。疲れていたんで、イタリアへ旅行に行くことにしました。」

納得しない幽霊は答えた。「私は天国へ行くように命じられています。もし私が逃げようとしたり、地獄の捕虜になろうとしたりした場合、私の不信感を抱く護衛が今この瞬間も私とあなたを見守っていると分かったとしても、それほど驚かないでしょう。どう思いますか？」幽霊は彼に背を向け、墓の方を向いた。まるで返事を待っているかのように、肩越しに覗き込んでいる。

しかしラザロは向きを変えて立ち去ろうとし、最後にこう言った。「あなたに幸運を祈るべきでしょう。しかし、あなたの召命によってあなたに与えられたこのような神の祝福を考えると、天国へ、これ以上の祝福はあなたに贈れません。あなたを知ることができて幸せです。」

簡潔に申し上げます。失礼いたしました。こんばんは、旦那様。

ラザロが暗闇の中へ足を踏み入れ、土手に向かって歩き出した時、幽霊が「祝福が与えられたのか？」と叫んだ。

彼は立ち止まり、振り返って聖霊に尋ねた。「あなたは旅に出ることを喜ばないのですか？」

「とんでもない！」と幽霊は叫んだ。そして、鼻を鳴らしてぶつぶつと呟いた。「恐ろしいことだ。」

ラザロは雑草の中から後ずさりし、墓を避けた。彼は困惑した様子で戻ってきて、亡霊に「天国はどうして恐ろしい場所になり得るのか？」と尋ねた。

幽霊は墓をちらりと見てから、明らかに感情に打ちひしがれた表情でラザロに近づいた。ラザロの前に立ち止まり、彼の目を見つめた。「なぜなら、私は天国に行けたのに、愛するソフィアは行けなかったからだ。」幽霊は首を横に振った。「2年以上もの間

百年間、私は天使たちの意志と技と戦い、この世に留まり、彷徨える魂として生き続け、妻の最後の記憶を私の中に生き続けさせてきた。私はこの天使と共に行くつもりはない。ただ愛するソフィアにもう一度敬意を表するために来たのだ。

彼女の誕生日。天使は毎年ここで私を見つけることを知っていて、私の宗教的な帰還を待っている。そして毎年、私たちは同じ出会いを繰り返す。私が来ると、彼女は私を捕まえ、天使が待っている間に私は敬意を表し、それから私は再び逃げる。彼女が追跡してこなかったのは、愚かさよりもむしろ憐れみからだと思う。もっとも、いつか、あるいは今すぐにでも、彼女は追跡するかもしれない。私はまたすぐに逃げ出すだろう。」虚ろな男は目をそらし、じっと見つめた。

木々の間を抜け、彼が待ち構える天使がいると知っていた大聖堂の廃墟へと向かった。

ラザロは幽霊の視線を追った。そして、「それは残念なことだ」と言った。二人は黙って立ち尽くし、神殿の遺跡をじっと見つめた。

幽霊は彼を振り返り、ため息をついた。「お詫びしなければならないのは私の方です。私は間違っ
「あなたは悪意を抱いていると疑っていました。それに、私の悩みをあなたに押し付ける立場にはありません。」
精霊は息を吸い込み、うなずき、丁寧な笑みを浮かべた。そして墓石に向かって招き入れるように手を差し出し、
「私の愛するソフィアと私をご紹介させてください。私たちはここに眠っています。」と言った。

幽霊はラザルスをじっと見つめ、簡潔な挨拶として軽くお辞儀をした。「私は故グレゴリー・メディチ卿、かつてはフィレンツェに住んでいました。ラザルス・ゴグさん、お会いできて光栄です。」

ラザロは微笑んでお辞儀を返した。「閣下、光栄なのはこの私の方です。」

「それで、若き君はイタリアへ何をしに来たのですか？」メディチ家の亡霊はマントをふくらませ、身を乗り出してラザロの折りたたまれた翼を調べた。

ラザロは慎重に答えた。「私は男を見つけて、彼と一緒にフランスへ戻らなければならない。」

「差し支えなければお伺いしたいのですが、どのような目的で？」

ラザロは目をそらした。「このことについては話してはいけません。お許しください。」

メディチは腕を組んだ。肘でマントを広げ、体を覆っていた。彼は身を乗り出し、ニヤリと笑って静かに尋ねた。「どんな秘密も、ささやくことさえできないほど重大なものだろうか？」

死者に対しても？」

ラザロは彼をじっと見つめ、肩をすくめて首を横に振った。「おそらく違うだろう」。彼は自分の使命を明かした。「門石が開いてしまった。それを閉じることができる修道士をイタリアで探しているのだ」。

メディチは顎を引っ込め、明らかに困惑した様子で「ゲートストーン？」と尋ねた。

ラザロは適切な説明をしようと口ごもった。「それは一種の封印だ。つまり、地獄への入り口だ。」

メディチは目を見開いた。彼は急いで墓地を見回し、おそらく善良な天使の居場所を探していたのだろう。それからラザロに近づき、激しくささやいた。「もう一度言ってくれ 門だと？」

ラザラスはうなずいた。彼の目は敷地内をくまなく見回し、まるで母や怪物の痕跡を少しでも見つけ出そうとしているかのように見えた。それから彼はささやくように話し始めた。「今、地獄への扉が少し開いている。私は修道士を見つけ出し、この不正を正すと誓った。私の言葉は神聖な誓約であり、できる限りこの最後の願いを忠実に果たすつもりだ。私の信仰そのものが、この聖なる約束を必ず果たすことを私に命じているのだから。」

メディチは飛び出し、ラザロの肩をつかんだ。「どんな門だ？教えてくれ！」

ラザラスは身を引いたが、幽霊の冷たい手はしっかりと彼を掴んだままだった。「精霊はそこを通れるのか？」

ラザラスは、自分のシャツに押し付けられた幽霊の握りしめた拳をじっと見つめた。その下では、まるで肉と血が骨まで冷え切ったかのように、腕にぞっとするような冷気が走った。彼は認めた。「霊がそこから逃げ出したことがある。おそらく、霊もそこを通り抜けるのだろう。」

突然、メディチの表情に絶望感がよぎった。彼は警戒しながらもう一度肩越しにちらりと見て、握る力を強めた。「私をこの門石まで連れて行ってくれ！」

「私は別の場所にいる修道士を探さなければならない」とラザラスはきっぱりと答え、幽霊のやや乱暴な抱擁をじっと見つめた。「私は今、話している門石に向かっているわけではない。」

「では、まずイタリアで修道士を見つけなければなりません！その後、私をゲートストーンまで案内してください、いいですか？」

ラザロは顎を食いしばった。彼は広い丘を見下ろす廃墟をじっと見つめた。「では、待っている天使はどうなったのか？」

幽霊は彼を揺さぶった。「彼女はいつも通り、もう少し待ってくれるわ！ここには時間がないのよ！すぐに逃げなくちゃ！」

ラザラスは眉をひそめ、スペクターの冷酷な拘束から身を振りほどいた。

メディチは突然両手を差し出した。「ラザロよ、許してくれ。我を忘れてしまったのだ。」彼は一步下がって頭を下げ、優しく尋ねた。「あなたの探求に同行させていただきませんか？私は何も望みませんし、あなたに負担をかけることもほとんどありません。」

ラザロは腕をさすって温めた。そしてうなずいた。「お望みなら。」

メディチは軽く微笑み、彼に懇願した。「それでは、急いで失礼させていただきます。」

ラザロはため息をつき、「閣下、イタリアまで行って戻ってくることさえできるかどうか、私には確信が持てません」と告白した。彼は神殿の廢墟の方を指さした。「しかし、天使があなたを待っています。あなたの天国は、まさに今、ここにあります。」

メディチは首を横に振った。「それは真実とはかけ離れている。もし君の言うことが本当なら、私の天国は門石の向こう側にあるだけだ」と、亡霊は夜空に向かって開いた手を突き出した。

「さあ、出発しましょうか？ はい？」

ラザロとメディチは共に檜の木立を後にし、天へと舞い上がった。彼らの後には、二つの古代の墓と、何も知らない天使が残された。

～*～

その夜の残りの時間、ラザラスとメディチはフランス南東部上空をひたすら飛行し、モール山塊のなだらかな丘陵地帯を越え続けた。彼らは、ラザラスが修道院の地図で覚えていたサン・ラファエルとサン・トロペという二つの海岸都市を目指して着実に前進した。言葉を交わすことはほとんどなかったが、彼らは常に警戒しながら後ろを振り返り、追ってくる天使や空飛ぶ豚の悪魔の気配を探していた。姿形は似ても似つかない二人だったが、その用心深い態度は、二人の間に共通点があることを示唆していたのかもしれない。彼らは、追われる獲物として、同じ根源的な不安を抱えていたのだ。

ラザロがようやく海にたどり着いたのは早朝のことだった。時間に余裕があった彼は南へ向きを変え、海岸線に沿って進み、サン・マキシム村を探した。そこで、頭の中にある数々の地図を頼りに、自分の位置を思い出すことができると考えたのだ。彼は海岸線をくまなく探し、もうこれ以上探せないところまで行った。そして、日の出前に村を見つけることはできないだろうと悟った。

彼は飛び込み、人里離れた内陸の入り江を囲む砂浜に倒れ込んだ。砂の上にうつ伏せになり、傷ついた鳥のように翼を広げて息を切らしていた。メディチが彼のそばに降り立った。「どうしたんだ？ 疲れているのか？」

「もう無理だ。食べなければ。」ラザロはうめき声を上げ、じっと横たわっていた。

「ああ、あれだ！」メディチは、まるで記憶が蘇ったかのような表情で、指を突き出して振りながら叫んだ。彼は両手を合わせてラザロの周りを歩き回り、砂浜に足跡を残さなかった。「死んでから200年も経つと、飢えの苦しみをすっかり忘れていた。」彼はラザロの傍らにひざまずいた。「確かに、あなたは食べなければならぬ。」

ラザラスは体を丸めて座り込み、翼をだらりと広げた。顔についた砂を払い、見上げると、メディチが入り江の縁にある岩だらけの尾根を調べているのが見えた。半透明の男は尾根の頂上をじっと見つめ、茂みの向こう側を見つめているようだった。ラザラスは、遠くまで探り、おそらく永遠をまっすぐに見つめているかのような、その大きく一点を見つめる視線を見つめた。幽霊は瞬きもせず、「ここで待っていてください、若者よ。あなたの空腹を満たしましょう」と呟いた。ラザラスが口を開く前に、メディチの幽玄な姿は消え去った。

メディチはラザロをはるか後方に置き去りにし、入り江から猛スピードで走り去った。その速さは、時間そのものさえも消え去るかのように思えた。彼はたちまち草の生い茂る尾根に着地し、注意深く雑草をかき分け、開けた場所にじっと座っているウサギに猟師のような視線を向けた。ウサギはまるで猛禽類に捕らえられたかのように、じっと空を見上げていた。突然驚いたウサギは、一見安全な場所へと駆け出した。

メディチが野ウサギを罾にかけて首を折ったとき、茂みの中にいた。緑の閃光とともに、幽霊は尾根をくまなく探し、イバラの束を集め、そこから戻っていった。

来た。

ラザロは海の砂浜に立ち、メディチを最後に見た場所をじっと見つめていた。

しかし、現れたのは海の波だけだった。彼は振り返って尾根を見渡した。

メディチは、手をすぼめて「陛下？」と大声で呼びかけた。彼は耳をそばだて、遠くの茂みの音に耳を澄ませたが、聞こえてくるのはカチカチと音を立てる甲虫と、落ち着きなく止まり木で休む鳥の音だけだった。「メディチ卿？」不自然で儂いパチパチという音が彼の注意を背後に引きつけた。彼は振り返り、息を呑み、後ろに飛び退き、砂の上に倒れた。彼の前には、メディチが両腕いっぱい薪とぐったりしたウサギを抱え、満面の笑みを浮かべて立っていた。

メディチはラザロに近づき、率直にこう言った。「私の記憶が正しければ、これはあなたの並外れた食欲を満たすには十分すぎるほどでしょう。」彼はウサギを持ち上げ、重さを確かめるかのように軽く揺すってから、「素晴らしい食事でしょう？」と付け加えた。

ラザロは気を取り直して立ち上がった。「あなたはそこにいた　そして、いなくなった　そして、またそこにいた」

「現れた」彼は砂を払いながら、「どうやって自分を解体して、そんな風に作り変えたんだ？」と尋ねた。

メディチはウサギを下ろし、くすくす笑いながら予言的に答えた。「死者はそれほど「生きている者が想像するほど無能ではない。」幽霊は焚き付けとウサギを浜辺に投げ捨て、ラザラスに後ろに下がるように優しく合図した。ラザラスはそれに従い、幽霊が不自然なほど速い動きでぼやけて消えていくのを見守った。エルジョの瞬きする間に、幽霊は焚き付けをパチパチと音を立てる火に変え、ウサギの皮を剥ぎ、きれいに処理し、串刺しにしたウサギをラザラスに差し出した。

「さあ、どうぞ」と、串刺しにした肉の曲がった脚を振りながら彼は言った。「まさか、お前のために焼いてやろうと思ってるのか？」

ラザラスは前進し、メディチから串を受け取りながら、彼から目を離さなかった。メディチはさりげなく微笑み、浜辺に腰を下ろした。じっと立っているラザラスを見上げ、火の方を指さしながら、機知に富んだ声でささやいた。「ラザラスよ、今こそそれを火にかざさなければならない。火がそれを準備するのだ。」

ラザラスはメディチをじっと見つめていることに気づいた。彼はぶつぶつ言いながら火のそばに座り、「火の起こし方は心得ている」と自分の能力を弁護した。彼はウサギを火の上で振り回し、メディチを見ると、彼はニヤリと笑っていた。それから彼は幽霊に尋ねた。「どうしてそんなに素早く動けるのですか？ どうしてそんなことが可能なのですか？」

メディチは眉を上げ、いたずらっぽい表情を浮かべた。彼はラザラスをじっと見つめ、「死とは、おそらく生のまた別の側面であり、永遠性はその多くの特徴の一つなのだろう」と示唆した。メディチはラザラスが言葉を考える時間を少し与え、それから温かい笑みを浮かべ、場の雰囲気や和らげた。

ラザラスは息を吸い込み、焼いているウサギに視線を落とした。「もしよろしければ、その魔法について教えてください。どうやってウサギを作ったのですか？」

幽霊は身を乗り出し、詮索好きな視線がないか周囲を見回すふりをしてから、マントの下を指さし、ラザラスにささやいた。「実は私が作ったんじゃないんだ。魔法の秘密は、マントの下にウサギを隠しているところなんだ。」

ラザラスはゴースト号の隅々まで調べた。「だが、マント越しによく見えた。ウサギはいなかった。」

メディチは鼻を鳴らし、笑いながら「冗談だよ、そんなものはなかった」と認めた。彼は半ば平静を取り戻し、ラザラスに真実を説明した。「魔法なんかじゃなかったんだ」。彼は肩をすくめ、両手を広げて、「君にはすぐには分からないウサギを見せただけだよ」と言った。彼は首を振った。「確かに魔法なんかじゃなかった。」

魔法だよ。実は私が作ったんじゃないんだ。」

ラザロは目を細めて彼を叱責した。「しかし、私はあなたが何も持っていないのを見たのに、突然ウサギを持っていた。あなたは何か呪術か魔術を使って、何も無いところからウサギを呼び出したのではないのか？」

「いえ、若様」メディチは片腕を後ろにもたせかけ、もう一方の腕を新たに立てた膝の上に置きながら答えた。「私が集めた魔法と奇跡について、お話ししましょう。」彼は少し間を置いて、過去の記憶をたどるかのよう
に砂を見つめた。彼は息を吸い込み、声に重々しい響きを帯びさせながら続けた。「この世に生を受けた
間、私は数々の魔法や妖術の告発、そしてそれ以上に多くの祝福や奇跡の主張を目にしてきました。かつて錬金術と
人相学の修行者として、私は発見、鋭い観察、そして記録された真実を通して、そうした告発や主張を払拭する
義務と機会の両方を持っていました。私の人生は仕事そのものでした。私は仕事に人生を捧げてきたので
す。とはいえ、私は自分の信仰と信念を貫き、説明のつかない出来事には必ず合理的な説明が存在することを常に知
っていました。医師として長年、私は多くの患者を診てきました。中には軽傷で予期せず亡くなった人もいれば、重
病を患いながらも生き延びた人もいました。そして、私は患者の状態に関わらず、すべての患者に同じように細
心の注意を払い、分け隔てなく治療を施しました。」メディチはラザロをじっと見つめ、微笑んで尋ねた。

「予期せず亡くなった患者の生存者たちが、私を重大な過失や殺人で告発したとあなたが考える
のはなぜでしょうか。」

私の患者が予想外に生き延びたことを知った他の人々は、私を魔術師だと非難したり、
あるいは、私の治療を完全に無視し、治癒は神の介入によるものだと主張したのだろうか？

ラザロは肩をすくめた。「あなたがこれらの人々を世話していた時、私はあなたと一緒にいませんでした。あなたが
話している他の人々も、おそらくあなたと一緒にいなかったのでしょう。あるいは、彼らはあなたに何を期待すべきか、
完全には理解していなかったのかもしれませんが。」彼はうなずき、目を細めた。「しかし、私はあなたが何も無いところ
からウサギを出現させたのを見ました。そして、それが普通の介入によるものでも、神の介入によるものでもない私は
信じています。ウサギを空から簡単に引きずり出すことはできないし、全能の神は単なる策略のために介入するわけではあ
りません。残るは魔術しかないように思えますが、あなたは魔術は使っていないと主張しています。あなたが嘘をついている
のではないとすれば、他に原因があるのでしょうか？」

「確かにあります」とメディチは微笑みながら答えた。「そして、あなたは私の質問に答えてく
れました。私が言及した人々は、何が起こるかを完全には知らなかったのです。」メディチは肩をすくめ
た。「実際、私たちは非日常を経験する準備が本当にできているわけではありません。」

予期せぬ事態に備えておくしかない。そして、もし万が一それが起こったとしても、私たちはそれをより平凡なものに見せるために、簡単に言い訳をすることができるだろう。特に、神の仕業や魔術、魔法、あるいは妖術といった主張によって。彼はラザルスが無表情な顔をじっと見つめた。「しかしながら、これらの主張はすべて同じ目的を果たしているように思える。つまり、普段は極めてありふれた、しかしめったに相互に関連しない出来事の、例外的な組み合わせに対する、より複雑な説明を退けるためだ。」

ラザロは「閣下、私には理解できません」と言い、体を揺らしながらウサギを火の上で転がした。「しかし、あまりにも単純すぎるとか、的外れなことを言っているように聞こえたら申し訳ないのですが、どうやってあの毛並みを作り出したのかお伺いしてもよろしいでしょうか？」

メディチはこう述べた。「あなた方にはただの偶然の産物に見えたかもしれないが、実は私は遠くからそれを手に入れたのだ。」

「持ってきたのか？遠くから？」ラザロは疑わしげな目で言った。「だが、お前はすぐに姿を消し、間髪入れずに現れた。何かを取りに行く時間などなかったはずだ。」

「いや、そうだったかな？」メディチはくすくす笑った。「死者にとって、ほんの一瞬など何の意味があるでしょう、若き殿下？」

ラザロは尋ねた。「もしよろしければお伺いしますが、閣下、なぜ私に質問で答えてなさるのですか。」

「答えを隠蔽する？」

「今は私が彼らを守っているのかもしれない」と幽霊は肩をすくめた。「そんな瞬間は私たち二人にとって非日常的に思えるだろうし、確かに用心深いやり取りを必要とするほど珍しいことだ。死人と空飛ぶ男が互いを不思議に思っているなんて？」彼は息を吸い込み、うなずいた。「多くの点で不思議なことに、私たちの航海は、実に珍しく予想外の旅仲間の組み合わせを生み出しました。若い君はどう思う？」

お客様？

海の波が海岸線に打ち寄せ、その通過を刻むようにしばらく時間が過ぎた。するとラザロは尋ねた。「閣下、あなたは2世紀前に亡くなられたとおっしゃいましたね？」

「それ以上は。そして、あなたは私を単に『グレゴリー』または『メディチ』と呼んでください、若者よ、私はあなたが手に持っている野ウサギよりも、はるかに主権者だ。」

「もう私に敬称をつけて呼ぶ必要はありません。私はもはや従者ではありません。ただのラザルスです。」

「あなたは従者だったのですか？」

ラザロはその質問を無視し、メディチに問い詰めた。「もしあなたが本当に言うように霊であるならば、なぜ私はあなたのような存在をもっと見たことがないのでしょうか？」

「ああ、たくさんいる。だが、私は彼らとは交わらない。天使たちが彼らを探し出して、隠れている私まで見つけてしまうといけなからだ。私は常に、私なりのやり方で、ひっそりと行動してきたのだ。」

メディチの心にも新たな疑念が芽生え、彼はラザルスを問い詰めた。「私はむしろ

あなたがまだ肉体を持っていて私を見ることができなのに、私のような霊を見たことがないと言うのは奇妙だ。一体どういうことだろうか？

ラザルスはこう認めた。「私は精霊を見たことがあるが、彼らは君よりもずっと明るく輝いていた。彼らは門石が開いたところから現れ、大聖堂の頂上に集まった悪魔の精霊だった。」

ラザルスはメディチをじっと見つめ、さらに問い詰めた。「君は、もっと控えめで男らしい姿をした、彼らの知られざる別の姿なのだろうか？」

幽霊は無表情なエルジョが立ち上がったのと同時に、顔をしかめて立ち上がった。二人は焚き火の光の下で向き合った。視線を交わしながら、互いの目に真実か欺瞞かの兆候を探した。その瞬間、聞こえるのは海がうなり、風が唸り、燃え盛る残り火が蛍のように散っていく音だけだった。もし彼らの無数の思考が燃え上がり、轟音を立てることができたなら、彼らの心は最大の嵐に匹敵する嵐、周囲のあらゆる地上の光景と音を飲み込むほどの強烈な嵐を創り出したかもしれない。それでも、幽霊はほとんど形を成していなかったため、ラザルスはメディチを容易に探ることができなかった。そして、エルジョは完全に不自然な存在だったため、メディチもラザルスを容易に感じ取ることができなかった。二人は、自分たちの間に漂う混乱の空間を鋭く感じ取っていた。そして、疑いなく、彼らはそれぞれのやり方でその存在を察知していた。

紛れもなく現実だった。それは、ほとんど知覚できないほどの、うねる混沌の雲のようで、飽くなき探求心と無限の疑念という、最高レベルの知的状態だけがそこに存在しうる場所だった。最も深い意味では、両者は互いに見えない存在のままだったように思われた。

メディチはついに口を開いた。「私は悪魔の精霊ではない。悪魔は私のように天国に行くことはできない。」彼は腕を組み、目を細めた。「それでも、私もあなたには驚かされる。あなたは

「あなたは悪魔ではなく、ただの空飛ぶ人間だと主張していますが、それなのに地獄への入り口の場所をご存知なのですね。」メディチは顎鬚を撫でながら指を振り、自らの疑念を口にした。

「私は200年間、地上を隅から隅まで探し回って、そのような門を探し求めてきました。その間ずっと、近くに人間や天使が突然近づいてくる気配を感じなかったことは一度もありませんでした。しかし、私が墓のそばでぼんやりと立っている間に、あなたがこれほど近くまで、しかも気づかずに近づいてきたことに、少々不安を感じています。」彼は眉を上げた。「もしかしてあなたは、奇妙な姿と偽りの振る舞いをした、知られざる悪魔の姿で、私を地獄へ誘い込もうとしているのでしょうか？」

「私は悪魔ではないと言っただろう。門石を閉じるために修道士を探しているのだ」とラザ口は宣言した。「地獄を求めているのはお前の方だ。」

「私は地獄を求めているのではない。私のソフィアを求めているのだ。」

「では、彼女は地獄にいるのか？」

「私には言えません」とメディチは言い返した。「しかし、あなたの修道士について教えてください。そして、ただの人間の修道士が、地獄についてこれほどまでに深い知識を持ち、地獄の奥深くまで知り尽くすことができたのはなぜなのか教えてください。」

その門の複雑な仕組みとともに。」

「私には分かりません」とラザロは認めた。「彼のやり方や手段は知りません。ただ名前と場所しか知りません。」

「では、なぜあなたは彼についてほとんど何も知らないのに、この修道士を探し出そうとするのですか？彼があなたのゲートストーンを統治できると、どうして確信できるのですか？」

「門石は私の物ではない」とラザロは叱責した。「私はただ修道士を連れてくるように頼まれただけだ。私はそうすると約束した。私は神のしもべたちに誓いを立てた。だから今、私は彼らの命令に従っているのだ。」

彼らは決して嘘をついたり、この探求において私に悪意を抱いたりすることはないだろう。だから私は修道士とその能力を信じている。私は十分なことを知っている。これ以上知る必要はない。」

メディチは視線をそらした。唇をすぼめて考え込むように頷いた。「まあ、悪くはないだろう。君はただ善行をなしただけだ。どんなに並外れた行為に見えようとも。」彼は息を吸い込んだ。「とはいえ、私は嘘をついていないし、君に悪意も抱いていない。君のためにウサギを捕まえてきたではないか？君に良い話し相手になってきたではないか？君が求めるであろうあらゆる敬意を示してきたではないか？」

メディチの質問は、ラザロに山の口で母と出会った時のこと、そして母が惜しみなく宝石を捧げてくれたことを思い出させた。彼はメディチに対し、教会の教えに則った賢明な言葉でこう答えた。「悪意はしばしば善行の下に隠される。その点において、私はあなたの真意を知ることはできない。しかし、私の真意は明白だ。私は、今や解き放たれた悪を縛りつける神の人を見つけなければならないのだ。」

メディチはため息をつき、両手を力なく空中に放り投げ、「だが、お前は私にそう言っているだけかもしれない。私が理解する限り、お前は私を罠に誘い込もうとしているのかもしれない。まさに地獄の入り口に！」と叫んだ。彼は腕を組んだ。「ラザロよ、答えてくれ。もしお前が、私が門石から来た悪霊の一人だと言うのなら、なぜ私がお前の探求に同行したいと思うだろうか？もし私が本当にそのような門から来たのなら、その場所を既に知っているはずだ。必要ないのに、なぜお前と一緒にイタリアへ冒険に出かける必要があるのだ？」

ラザルスは同様の提案で反論した。「もしかしたら、あなたは私にだけそう言っているのかもしれませんがね。私はあなたにイタリアへ同行してほしいとは頼んでいません。私の知る限り、ソフィア様は存在しないかもしれませんが。あなたは密かに私に同行して、修道士を自分の目で確かめ、門石が閉ざされる前に彼を殺したいと思っているのかもしれませんがね？」

メディチは腰に手を当てて冷たく言った。「私は悪魔と結託していない、ラザロ。そして、私が墓地にいたのは、あなたのせいではない。さらに、

あなたが私に心を奪われたまさにその瞬間、天使は私を天国へ導こうとしていたのです。

ラザロはうなずき、海を見渡した。「メディチよ、私はあなたの天使の声に導かれる前は、イタリアへ向かっていたのだ。」

「彼女は私のものじゃない」とメディチは反論した。彼はため息をつき、腕を下ろした。「わかった。おそらく我々は二人とも真実を語っているが、同時に相手に悪意があると疑っているのだろう。」

しかし、私は決して悪意を持っていないことを確信しています。たとえあなたの意図が誠実でないと疑ったとしても、最終的に私のソフィアを見つけるためには、あなたに同行し、必要であれば修道士を見つける手助けをしなければならないと感じています。」幻影は軽くお辞儀をした。「あなたの意図が私の意図と同じくらい誠実であるとしか信じられません。」

ラザロはメディチの優しい言葉と親切な行いを思い返した。彼は会釈を返した。「そして、私はあなたとの交友関係と過去の行いに誠実さを感じました。何しろ、私は天使の御前であなたに出会ったのですから。そして、あなたは私のためにウサギを見つけてくれたのです。」彼は微笑みながら、「感謝しなければなりませんね」と付け加えた。

緊張は和らぎ、二人は火のそばに座り、ほんの少し前よりもずっと穏やかな気持ちになった。しばらくの間、二人は交代でジュージューと音を立てる肉と、次第に薄れて重なり合う泡の線だけになってしまう波を眺めていた。

ラザロは言った。「メディチ様、どうか私の不信をお許しください。ただ、私はこれまで一度も人間の霊を見たことがないのです。」

「ラザルス、私の疑念も許してください」とメディチは言った。「私の人生と死を経験したとはいえ、空を飛ぶような人物には一度も出会ったことがない。それどころか、200年以上の間、生きている人間と会話できたことは一度もなかった。今までは。」

「あなたのように、さまよう魂は他にもたくさんいるのですか？」とラザロは尋ねた。

「ええ、これまでに生まれた男女や子供の数と同じくらい多くの魂が存在すると言えるでしょう。私は、無数の魂が戦場の跡地をぼうぜんとさまよっているのを何度も見てきました。時には、彼らは大勢いることもありますが、天使が現れて連れ去ってしまうまでのほんの短い間だけです。しかし、一度にそれほど多くの魂を見ることは滅多にありません。たいていは、通りすがりに一、二体の魂を見かける程度です。それでも、天使に見つからないように、急いで逃げなければなりません。」

「彼らは精霊たちをどこへ運ぶのか？」

メディチは肩をすくめた。「天国か地獄だろう。ここ以外のどこかだ。私が知る限り、精霊が地上をさまようことは禁じられている。」

「でも、あなたはそうする。」

"私はします。"

「では、なぜ彼らはそれを許すのか？」

スペクターは首を振り、いたずらっぽく微笑んだ。「許してやるよ、彼は胸を軽く叩き、ささやいた。「もし奴らが私を捕らえなければ、私は自由に彷徨い続けるだろう、彼はくすくす笑い、両手をローブのポケットに突っ込んだ。「ああ、奴らは私がここにいることを知っているどこかに。そして、この地上をさまよう放浪者は私だけではない、と私は強く感じている」

ラザロは彼に尋ねた。「では、あなたが逃げ出した、あの墓場の天使はどうなったのですか？」

彼女はあなたを泊まらせてくれなかったのですか？

「アズラエル？」メディチは笑った。「彼女は追跡がうまい。ソフィアへの定期的な訪問以外にも、アズラエルはその後何度か私を追い詰めてきた。そしていつものように、私は彼女に天国に行く準備ができていると告げ、彼女の注意をそらし、そして彼女から逃れる。彼女は私を捕まえようと必死にはならない。結局のところ、彼女はおそらく密かに私の窮状を哀れんでいるのだろう。彼女は私がどこにいるかをアザゼルに決して教えない。なぜなら、私が彼女と遭遇して以来、アザゼルは姿を現していないからだ。彼女は私を哀れんでいるのか、それとも彼を嫌っているのか、あるいはその両方なのか。」

「アザゼル？」ラザロは尋ねた。

メディチはうなずいた。「もう一方の方だ。」

ラザロはうなずき、彼をじっと見つめた。「確かに。そうでなければ、どんな善良な魂が天国から逃げ出すだろうか？彼はウサギを回転させながら尋ねた。「では、もしアズラエルがあなたを地獄へ連れて行くと約束したらどうだろう？今私と一緒にいるように、彼女と一緒に行くだろうか？ソフィアを迎えに行くために？」

「いや、ラザロ。アズラエルは善良な魂を天国へ導くだけだ。もう一人の天使、アザゼルと名乗る奴は、無知で彷徨える魂を地獄へ引きずり込む。そして、私は長年の間に一度だけ、運悪くそいつに出くわしてしまった。飢えた野獣からかうじて逃れたものだ。」

「なぜ彼と一緒に地獄へ行かなかったのですか？ソフィアを迎えに行くために？」

「アザゼルに付き添うだと？」メディチは信じられないといった様子で笑った。「誰も自ら進んで彼に付き添うことはない。彼は魂を捕らえ、裸にして強姦する。まるで今お前が見ているウサギのように。」捕らえられ、逃げられない場所に完全に飲み込まれてしまう。アズラエルはその後、アザゼルについて私に警告し、彼は天使クロノスの私生児であり、愛情を込めて抱擁したと語っている。アザゼルはすべての魂を食らい、自分の一部にしてしまう。アズラエルはずっと前に、もし私が彼女と共に天国に行かなければ、アザゼルはいずれ私を見つけ出し、貪り食い、自分の中に閉じ込めたまま地獄へ連れて行くと明言していた。」幽霊は顔をしかめた。表情が険しくなり、ラザロの方へ身を乗り出した。「私が地上をさまよっている間、アザゼルは

同様に、彼には私を捕らえる権利がある。もし彼に捕らえられたら、私は自分の力で地獄に入ったことにはならない。そして、私は永遠に囚われの身となることを確信している。だからこそ、私は密かに、もっとふさわしい地獄への入り口を探し求めてきたのだ。自分の力で、出入りできるような入り口を。

「ソフィアを地獄から盗むためだって？」ラザルスは問いかけた。
メディチはうなずいた。「そうしよう。」

「そんなことがあり得るだろうか？私にはそうは思えない」とラザロは答えた。「それに、彼女が天国にいないと、あるいは本当に地獄にいると、どうして断言できるのだ？もしかしたら、彼女はあなたと同じように、ただ地上をさまよっているだけかもしれない。」

「もし彼女が地上にいたなら、私が地獄への入り口を探し求めてきたこの200年の間に、とっくに彼女を見つけていだろう」とメディチは言い、人差し指を海の水平線へと向けた。「そしてアズラエルは、彼女が天国にいないことをほぼ認めている。だから、彼女は地獄にいるに違いないと私は考えている。」

「天使はあなたに何と言ったのですか？」
メディチはため息をつき、浜辺をちらりと見てから、「まあ、アズラエルが言ったようなことではなかった」と認めた。彼が言った言葉が、私を納得させた。それは、彼が言わなかったことだった。
ラザロは耳をそばだてた。「では、彼はあなたに何を話さなかったのですか？」
幽霊は目を細め、ラザロを非難するように指を突きつけながら、はっきりと囁いた。「私がアズラエルに、私のソフィアが天国にいるのかと尋ねるたびに、彼は私が天国に行けばすべてが明らかになると言う。そして、私が彼女が地獄にいるのかと尋ねるたびに、彼は同じことを言うだけだ。」

「では、あなたは彼女が地獄にいると信じているのですか？」ラザロは首を横に振り、すっかり困惑した。「もし天使が彼女の居場所について同じ答えをしたのなら、なぜあなたは彼女が地獄にいるとだけ信じ、天国にはいないと信じているのですか？」

ラザルスはメディッチが立ち上がり、背を向けて海を見つめるのを見ていた。海に向かって一定の風が吹いていたが、幽霊のマントの輪郭は微動だにしない。やがて、幽霊は頭を少しだけ回し、砂浜を見つめ、まるで物思いにふけているかのようだった。最後に、幽霊は息を吸い込み、うなずいてから、完全に向きを変えてラザルスの方を向いた。「ラザルス、アズラエルが私に言ったこと、言わなかったことだけで、私のソフィアが地獄にいると疑っているわけではありません。彼女がほぼ確実に地獄にいるという私の意見にあなたが同意するには、もっと多くのことを話さなければなりません。」幽霊は火の周りを回り、ラザルスのそばにひざまずき、イバラを炎の中にさらに深く押し込んだ。

ラザルスは幽霊の目を見つめた。緑がかった瞳は遠くにあるように見えた。まるで炎の光に囚われているかのよう
に 永遠を見つめているかのようだった。

メディチは自身の過去を語った。「私は職業上、医師であるだけでなく錬金術師でもありました。そのため、化の最も一般的な生理的影響を阻害したり、あるいは予防したりするために投与できる、異国情緒あふれる調合薬や陶酔作用のある処方箋の発見に没頭していました。研究が進むにつれて、私の道具や方法はますます型破りになり、確かに従来
の規範とは相容れないものになっていきました。

キリスト教世界。そのため、私は恐怖から秘密裏に研究を続ける以外に選択肢がなかった。異端や魔術の罪で告発されることはないだろう。結局のところ、私が探していたのは、不不死を約束するかもしれない、油、抽出物、金属、そして血液塩の独特で精密な調合物だったのだから。実際、私は古代の霊薬そのものを調合しようと試みたのだ。

「そんなものが存在するのか？」とラザロは尋ねた。

メディチは肩をすくめた。「今となっては、そんなことはどうでもいい。だが、生前はそう信じていたのだ。』彼はため息をつき、ラザルスに厳粛な笑みを向けた。「私以外に、私の探求の秘密を知っていたのはたった一人だけだった。それは、私の信頼できる相談相手であり、良き伴侶であったソフィアだった。」

ラザロはうなずき、丁寧に視線を焼いているウサギに落とした。

幽霊は炎の中心に手を伸ばし、燃え盛る炭を取り出してじっくりと調べながら続けた。「あと少しだった。本当に霊薬を完成させる寸前だと信じていたんだ。」彼は炭を炎の中に投げ戻し、さらに続けた。「それでも、その信念が私を駆り立て、その混合物に活力を与えるたった一つの材料を探し求めて、多くの奇妙で異国情緒あふれる土地を探検させたのだ。」亡霊は視線をそらし、波をじっと見つめてから、明らかに暗い表情でラザルスの方を振り返った。

「私はソフィアに、これが最後の海外航海になると約束しました。私が乗船した商船は、出航後まもなく激しい嵐に見舞われました。嵐は船を沈没寸前にまで追い込み、最初の寄港地をはるかに過ぎてしまいました。船長は引き返して嵐の中に戻るのではなく、そのまま航海を続け、残りの航路を無事に終えることができました。しかし、嵐で沈没したという思い込みが広まり、嵐で船体から引きちぎられた破片が、私たちが無視した港の近くに打ち上げられたことで、その思い込みは確信へと変わりました。そして、全船が沈没したという誤った情報が、真実として私のソフィアの耳に入ってしまったのです。」メディチは微笑んで首を振ったが、ラザルスは彼の顔に浮かぶ苦痛を見抜いた。「彼女は情熱的な娘でした。愚かだったと言ってもいいでしょう。彼女は自ら命を絶ったのです。」

二人はウサギと、それを包み込む炎に目を向けた。

「そういうことだ」とメディチは肩をすくめて言った。「私の愛する人は地獄にいると私は信じている。君は地獄の門を知っているだろう。そして私は、私が知りたい唯一の天国を取り戻したいと願っている。」

二人の間にしばしの沈黙が流れた。炎は海風に揺らめき、ラザルスはぼんやりと遠くの海の水平線を見つめていた。

「ウサギを燔祭として準備するのか？」メディチは今の方を向いて頷きながら尋ねた。黒焦げのウサギ。

「ああ！」ラザロは我に返り、ウサギを救い出し、燃える棒の上に高く掲げた。

そよ風が炎を消し、ウサギを冷やした。彼はメディチの方を向き、「もしよろしければお伺いしたいのですが、あなたはどのように亡くなったのですか？」と尋ねた。

幽霊はくすくす笑い、炎の中を指さした。彼の確かな手は炎を貫いていた。

「これこそが、私の商売道具そのものである、悪名高きプロメテウスの贈り物 火だ。私は眠っている間に死んだ。」

「あなたは焼死したのですか？」

「いや、あれは私の薬剤や抽出物の入った容器から出た煙が、置き忘れたオイルランプに引火させたのだ。私が探し求めていた永遠の霊薬の原料から出た、まさにその致命的な煙だったのだ。」メディチはくすくす笑った。「そして今、私は200年後にここにいる。」

彼は少し間を置いてこう付け加えた。「偶然にも、私は結局、不不死の霊薬を発見したのかもしれない。ただ、不不死を得るためには、まず自分を殺さなければならないとは知らなかった。」

ラザロは目を細めて考え込み、乾いた笑いを漏らした。彼は慌てて我に返り、「メディチよ、どうかお許しください」と言った。

「心配するな、ラザロ」メディチは立ち上がりながら彼を安心させた。「腹いっぱい食べて、苦痛を紛らわせろ。」幽霊は火から離れ、ラザロに呼びかけた。「最寄りの村の名前を言って、我々の居場所を確かめなければならない。すぐ戻る。」

ラザルスは幽霊が海岸線に近づいてくるのを見ていた。幽霊はゆっくりとした足取りで星の配置を調べた。すると、メディチの顔が空中に浮かび上がり、そして消えた。

飢えたラザロは、漆黒の空の下、時が流れる中、食事をむさぼり食った。やがて、漂う燃えさしは、消えゆく火の炭から群がる蛍のようだった。ラザロは砂浜を歩き回り、砂に刻まれた足跡の円は次第に狭まりながら、幽霊の気配を探して空を見上げた。しかし、彼の目はすぐに海の方角、東の水平線へと向けられ、最初の赤い線に釘付けになった。

夜明けの兆し。彼は火の周りをぐるぐる回り、反対方向に歩き回り、両手を

彼はそわそわしながら、視線を東の方に向けていた。

彼の肩越しに声が聞こえ、「気分はどうですか？」と尋ねた。
ラザルスは激しく回転し、砂の上に倒れ込んだ。彼は近づいてくる幽霊のぼんやりとした姿を見つめた。
彼は睨みつけ、メディチが微笑みながら近づいてくるのを見て立ち上がった。

「ラザロ、許してくれ。もっと率直に話すべきだった。」
ラザルスは息を切らし、「ああ、君がそう望むなら」とぶつぶつ言いながら、スペクター号に向かって足早に歩き出した。輝く地平線をちらりと見てから、煙を上げる炭火に砂を蹴りかけ、「メディチ家よ、急いで出発しなければならぬ」と言った。

メディチはラザルスの前に立ち止まり、海岸線の方を指差した。「サン・マキシムの村を見つけました。ここからほんの少しの距離です。あなたは多くの才能をお持ちのようですね。しかも今は、鋭い方向感覚まで備えているようです。幽霊は腕を組み、「実に素晴らしい。あなたは本当にこれまで一度も旅をしたことがないのですか？」と付け加えた。

「メディチ！」ラザルスは口を挟み、海上のかすかな光に向かって指を突き出した。「メディチ、これは私を殺してしまうぞ。すぐに避難しなければならない！」

「避難場所？海からの避難場所？」

「太陽のせいです」とラザロは答え、さらに詳しく説明した。「私は太陽による重篤な病気にかかっています。」

「ああ」とメディチは頷きながら言った。「並外れた能力には、予想通り並外れた弱点が伴うものだ。」彼は振り返り、海岸の入り江から内陸の方を指差した。「あそこには森がある。日陰もたっぷりだ。それで十分だろうか？」

「もっと暗い場所を探している。洞窟とか、そういう類の場所がいいな。」

メディチは顎を撫でながら考え込んだ。「洞窟は見当たらなかった。」彼は東の空を見上げた。「それに、夜明け前に村に着くことはできないだろう。」彼は首を振り、肩をすくめた。「私にとっては簡単だ。海の底、地面の下、あるいは

木の中にいる。それでもあなたは生きている、そして呼吸しなければならない。」

「こんばんは」とラザロは言い、翼を傾けながらゆっくりと旋回して去っていった。
「ああ！いい場所を知っているぞ！」メディチは叫び、南の海岸線を指差した。「岩礁に難破船がある。船体はまだしっかりと密閉されている。どう思う？」

「あなたは真実を語っているのですか？」

「名誉にかけて誓います。私は高潔な紳士ですから」とメディチは言い張った。「ソフィアを見つけるためには、あなたに無傷でいてもらう必要があります。船は封印されており、きっと役に立つでしょう。」

「見せてくれますか？」

「もちろんです！すぐに！」

ラザロは地平線を見渡した。「陸と海に逆らって、低く速く飛ばなければならない。」彼は振り返った。メディチに向かって手を振り、天に向かって前へと手を振った。「私も後に続くべきだ。」

二人は空へと忍び込み、消えゆく火と黒焦げになったウサギの頭を残していった。捨てられた残骸は、奇妙な二人が去っていく上昇方向を恐ろしく見つめ、まるで最後の、深遠な、そして全く観客のいない中で繰り広げられる永続的なパフォーマンス。そしてその終盤には、黒く獣のような、そして完全に捨て去られた、広くて空虚な穴のような目を見上げながら、永遠に静止したまま横たわる。

【第19章終了】



この文学作品は、

エドガー・アラン・ポー（1809年 - 1849年）

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~